

熊本県立劇場落成記念公演

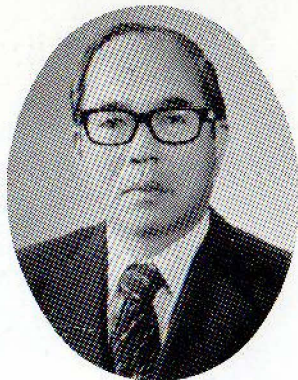
第九

熊本県立劇場・熊本市大江2丁目7-1 ☎63-2233

DEC. 28. 1982/PM6:30

熊本県立劇場コンサートホール

主催：熊本県・県民第九の会



熊本県知事

沢田 一 精

県民の皆様から、ご期待をお寄せ頂いております。熊本県立劇場が、このほど完成を見ました。建設に際し賜りました各方面からのご協力に対し、厚くお礼申し上げます。

熊本県立劇場は、わが熊本を、豊かで暮らしよい、魅力に満ちた郷土とするための、文化の拠点として、又、心の豊かさを醸し出すふれ合いの場として建設されたものであります。

どうか県立劇場が、県民の皆様の文化創造に、芸術鑑賞に、そして、豊かな精神生活の充足に、大きな役割を果たして、真に県民の文化的財産となることを願っております。

おかげ様で、文化施設としては、全国に比肩できるだけの条件を備えたものになったことを誇りに思っております。

この施設を、その建設目的に沿って効果的に生かすのは、ひとえに今後の運営と、県民の方々のご協力にかかっていると存じます。熊本県立劇場が、皆様に親しまれ、育てられ、わが国はもとより国際的な評価のもとに力強く活動を展開して行くことを心から期待して、ごあいさつといたします。



熊本県文化協会会長

岩下 雄 二

新装成った県立劇場のコンサートホールで「県民第九の会」の皆様による演奏会が開かれますことを、心からお祝い申し上げます。

山田一雄氏を指揮者に、ソリストには具出身の最高級の方を迎え、合唱団、オーケストラ合せて400人という、まさに県民による「第九」演奏会は、このコンサートホール落成をお祝いするのに最もふさわしい催しであると思います。先日は、こけらおとしでNHK交響楽団の素晴らしい演奏によって、このホールが披露されました。最近、全国的に、大きく、そして立派な会館（ホール）が誕生しているようですが、まだまだ多目的ホールが大部分のようです。そのなかで、我が熊本県で、このような音楽専用ホールが落成したことは、県民として一つの大きな誇りであります。だから私達は、宝の持ちぐされにならないようにしたいものです。それには、国内外の優秀な演奏家や、演奏団体を招くと同時に、今日の県民第九のように、県内の創造団体が、常に利用するようになって、はじめて、このコンサートホールの存在価値も高まり、県の文化向上につながるものと信じます。

終りに、今日の演奏会のご成功を祈念しまして、お祝いの言葉と致します。



県民第九の会実行委員長

有馬 俊 一

歳末ご多忙な折、よくおいで下さいました。県立劇場の晴れのステージで「第九」を、という夢が実現されて胸の高鳴るのを覚えます。本日の出演者は、オーケストラも合唱団も独唱者もみんな熊本の人間です。そしてその大部分は音楽の専門家ではない、つまり素人の集まりです。その人達が協力して「第九」を演奏する、何と素晴らしいことでしょう。

九月以来私達は休日を犠牲にして練習を重ねて参りました。リズムを合わせ声を揃えて、厳しい訓練を積んで来ました。この年末、全国各地で開かれる「第九」の演奏会は、おそらく何十回を数えるでしょう。その中で最高のものにしたいと私達は願っております。山田一雄先生の卓越したご指導で、その願いにいくらか近づくことが出来たかと自負しております。

しかし、「第九」は演奏者と聴衆とが一体となって創る音楽です。皆様方の温かいお励ましによって、演奏はよりよいものになると思います。ご声援をお願いします。そして県立劇場のホール一杯高らかに、歓喜の調べを響かせましょう。

1.越天楽(雅楽)……………近衛秀麿(編曲)

2.交響曲 第九番 二短調 作品125「合唱付き」
……………ベートーヴェン

| | | |
|----|---------|------|
| 指揮 | | 山田一雄 |
| 独唱 | ソプラノ | 新圭子 |
| | メゾ・ソプラノ | 木村宏子 |
| | テノール | 伊津野修 |
| | バス | 高橋修一 |

| | |
|------|-----------|
| 合唱指揮 | 林原隆治 |
| 合唱 | 県民第九の会合唱団 |
| 管弦楽 | 熊本交響楽団 |

山田一雄
KAZUO YAMADA



1912年東京で生まれる。学習院を経て東京音楽学校（現東京芸術大学）に入学。ピアノをレオ・シロタ、パウル・ワインガルテンに、作曲をクラウス・プリングスハイムに学び、1935年同校を首席で卒業。その後外遊し、帰国後ピアニストとして活動し、且つ作曲家として楽団「プロメテ」を結成する。

1937年には自作の管弦楽曲で「日本放送協会賞」一位受賞。1938年には交響詩〈若者のうたえる歌〉で「新交響楽団賞」また、同年に交響管弦楽〈交響曲木曾〉により「ワインガルトナー賞」を受賞。その間指揮法をヨゼフ・ローゼンストックに学ぶ。

1940年新交響楽団（現NHK交響楽団）の常任指揮者に迎えられ、以後13年の間、同団の飛躍的向上に寄与した功績は大きい。この間にストラヴィンスキー〈春の祭典〉マーラー〈交響曲第8番千人の交響曲〉ハチャトリアン〈ガイース〉ショスタコーヴィチ〈交響曲第5番〉パッハ〈ロ短調ミサ〉R・シュトラウス〈ドンキホーテ〉その他多数の本邦初演、幾多の日本人管弦曲の初演を行う。

1949年にはNHK主催の同団におけるオペラ〈ヘンゼルとグレーテル〉上演で「毎日音楽賞」を受賞。

1955年以後は東西ドイツ（ドレスデン交響楽団ほか）、ソビエト（ソビエト国立交響楽団）チェコスロヴァキア（スロヴァキア・フィル）イスラエル（イスラエル・フィル）北、南アメリカ、南アフリカなど海外の活動も多繁となる。東京芸術大学の指揮科教授を努め、1972年より1981年まで京都市交響楽団音楽監督兼常任指揮者、正指揮者を務める。

1970年10月紫綬褒章受賞。
1978年4夜にわたる画期的な企画「山田一雄の世界」〈ブラームスの夕べ〉、〈メシアンの夕べ〉、〈モーツァルトの夕べ〉、マーラー〈千人の交響曲〉は特筆すべきもの。これらの不動の評価に対し1979年「芸術選奨文部大臣賞」受賞。現在は京都市響芸術顧問、新星日本交響楽団名誉指揮者、日本合唱協会音楽監督、日本マーラー協会理事長、日本指揮者協会副会長など諸音楽団体の理事、顧問などをつとめる一方、NHK交響楽団、京都市交響楽団、東京都交響楽団、国外の諸交響楽団などの客演指揮者としての多忙な活動で屈指の名演を展開している。



ソリスト紹介



新 圭子
(ソプラノ)

昭和27年 毎日音楽コンクール入賞。その後も研
 鑽を続け、今日に至る。戴冠ミサ曲(於
 東京カテドラル)をはじめ、熊本音楽
 連盟主催による第九交響曲、ドイツレ
 クイエム、カルミナブラーナ、その他
 数多くのソリストとして印象的な好演
 をのこす。

昭和49年 日本歌曲のリサイタルを東京朝日生命
 ホールにて開催。朝日新聞及び音楽の
 友誌に好評を得る。

昭和50年 熊本県文化懇話会賞を受賞する。

昭和54年 イタリア中心の音楽のルーツを旅する。

昭和55年 東京に於ける二回目のリサイタルを第
 一生命ホールにて開催。その抒情性の
 高い好演は再度音楽の友誌に絶賛さる。

昭和56年 17回目のリサイタルを開催。イタリア
 近代歌曲に新境地を開拓する。

○東京音楽学校(現芸大)在学中、故
 木下 保氏の薫陶を受け、歌曲の心を
 学んだという。故 四家文子、又、福
 沢アクリヴィ諸師の門を歴訪。やがて
 ベルカント唱法の道を辿り今日に至る。
 毎日音楽コンクール受賞以来、積極的
 な演奏活動をもって県の音楽文化向上
 に寄与し、本夕協演の木村宏子、伊津
 野修両氏とは古い師弟関係にある。



木村宏子
(メゾ・ソプラノ)

東京芸術大学卒業。関種子、佐々木成子、木下武
 久の各氏に師事。
 1957年文化放送賞受賞。
 1959年「フィガロの結婚」のケルビーノでオペラ
 にデビュー。「椿姫」のフローラ、「ロング・クリ
 スマス・ディナー」(ヒンデミット)のジュネヴ
 ィエーヴ、「ラインの黄金」のフロースヒルデ及
 びウォークリンデ、「蝶々夫人」のスズキ、「こう
 もり」のオルロフスキー、「ナクソス島のアリア
 ドネ」(R.シュトラウス)、「ファウスト」のジー
 ベルなどを歌っている。
 最近では1981年「葵の上」(別宮貞雄)の御息所
 (日本オペラ協会)、「昏妃」(山田耕筰)の蔭の声、
 1982年「デイドとエネアス」(パーセル)のデ
 イド(室内歌劇場)を歌い共に好評を得ている。
 とりわけデイドの演技と歌唱に対しては、昭和57
 年度ウィンナーワールド・オペラ賞が贈られること
 になっている。

他方コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・
 ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年
 から5年間N響の「第九」のソリストとして連続
 して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演
 により、「レクイエム」(モーツァルト、ヴェルデ
 ィ)、「メサイア」(ヘンデル)、「クリスマス・オ
 ラトリオ」(バッハ)、「変ホ長調ミサ」(シューベ
 ルト)他多くの曲を演奏しており、この分野に於
 ても不可欠の存在となっている。

また'74年の「毎日ソリスト」で'78年6月、'82
 年9月に行ったりサイタルでは、ドイツ歌曲の真
 髓に迫り絶賛をあびている。
 二期会会員、ビクター専属。



伊津野 修
(テノール)

熊本県立第一高等学校卒業。
 東京芸術大学音楽学部音楽科卒業。
 ミラノ、ジュゼッペ・ヴェルディ国立音楽院オペラ
 研究科修了。

第10回 F.P.ネリヤ(エンナ)国際音楽コンク
 ール第3位。

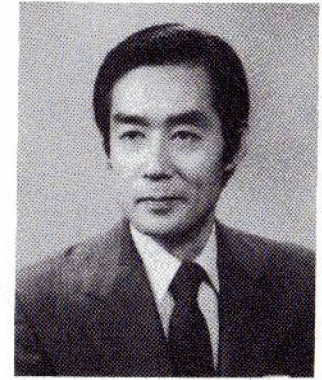
第1回 モンティキアーリ国際音楽コンクール入
 賞。

第8回 メラーノ国際音楽コンクール入賞。

岩津範和、新 圭子、渡辺高之助、R・リッチ、
 S・D・フランチェスコ、L・マゼンタ、C・
 アルフィエリ、E・カンボガッリアーニの諸氏
 に師事。

滞欧中、スイス、フランス、イタリア等におい
 て各種演奏会に出演。地元紙より好評を博した。
 帰国後は、リサイタル、東フィルとの第九のソ
 ロ等、各種演奏会で幅広い活動を続けながら後進
 の指導にもあたっている。

現在、二期会会員、文教大学教授。



高橋 修一
(バス)

東京芸術大学卒業、同大学院修了
 ウィーン国立音楽大学留学。学部在学中よりソリ
 ストとして活躍
 文化放送音楽賞
 毎日、NHKコンクール第1位並びにコンクール
 大賞。
 民音コンクール第1位。
 毎日、NHK海外派遣審査第1位。
 オランダのヘルトーゲンボッシュ国際音楽家コン
 クール第1位並びにグランプリ受賞。
 オーストリーの州立グラーツ歌劇場専属歌手とな
 る。
 1971年帰国後、オペラ、オラトリオ、リートの各
 分野で活躍を続ける。
 1978年には、ミュンヘン、ウィーンに於て名歌手
 ハンス・ホッターの下でドイツリートの研究を積
 む。東京学芸大学助教授。東京芸術大学講師とし
 て後進の指導にあたる。

越天楽(雅楽)

1931年、古くより日本の宮中に伝わる雅楽の名曲である「越天楽」をオーケストラのために編曲したもので、編曲者の弟近衛直麿が雅楽の楽器のために五線譜で採譜したのものにより、近衛秀麿が大編成のオーケストラの曲とした。

この編曲は、編曲者の考えにより、伝統的な雅楽での終結は、現代の欧米人に異様な感を与えるため、最後のコーダに手を加えたほかは、近衛直麿が五線譜に転写した原曲の形に従っている。

また、編曲者は、笙を模したバイオリンの奏法や、ひちりきの音量に見合ったフルート、オーボエ、ピオラの数を要求したり、楽器の配置についても、細かな注意を楽譜に書き込むなど、この曲が原曲の響きをそのまま近代のオーケストラによって再現することを目的とした編曲であることを物語っている。

この曲の国内での初演は、編曲者自身の指揮により、1931年2月28日、日比谷公会堂で行われたが、彼はこれより以前、モスクワでも指揮している。

この曲の外国における演奏についての反響を指揮者の山田一雄氏の手記より引用する。

……こんなことばをくり返すだけでした。「この地球のものとは信じられないほどの不思議な轟惑(こわく)的な酒だ」

私が15年ほど前に、ハンブルグとフェノスアイレスでのコンサートの開幕一番にこの「越天楽」を演奏した折に、向うの評論家たちは、ものに憑(つ)かれたような眼つきと、初めて耳にした東洋の妖しい神秘のひびきに、ただただ感動しているばかりでした。

日本人にとっては、雅楽のひびきなどは、殆どの人の耳をいつか、どこかで通過しているの、いま更どういふことは無いけれども、青い目の人々にとっては、その前衛的な響きというよりも、むしろあの雰囲気、からだの全細胞が完全にうちのめされ、その芳感に酔いしれた感じだったのでしょ……。

1979年 山田一雄

交響曲第九番ニ短調「合唱付き」

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ポンのフィッシュェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大なる精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしてい

た。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する儀礼なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一章】アレグロ・マ・ノン・トロppo・ウンポコ・マエストーソ

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度(第三音がない)の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃(ほうはい)として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然(しょうぜん)たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分まじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは、再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二章】モルトヴィヴァーチェ、スケルツォ

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考える限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆

りたてられるからである……」と言っている。

【第三章】アダージョ・モルト・エ・カンタービレ・アンダンテ・マエストーソ

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するような明るく美しい第2主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱(ゆううつ)な感覚へと溶けさせて行くことか、思い出がとくに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」と言っている。

【第四章】終曲

第1呈示部=まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返ししながら全管弦楽に至る。

第2呈示部=この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく。やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部=やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ=曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストーソとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

■シラー＝《歓喜に寄す》

対訳＝大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne / Sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmlische, dein Heiligtum /
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weid errungen,
Mische seinen Jubel ein /
Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund /
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend such aus diesem Bund /

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen Millionen /
Diesen Kuss der ganzen Welt /
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn über'm Sternenzelt /
Über Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

- ① 歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
- ② この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

- ③ 大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情を勝ち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
- ④ しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

- ⑤ すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
- ⑥ 歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

- ⑦ 歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
- ⑧ 同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合 唱

- ⑨ たがいには手を取り合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
- ⑩ ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

“第九にこがれて”

桜井 登美子

ここ数日来、私はベートーヴェンのことで少年
の様心がふくらんでいます。

暮の28日、県立劇場の柿落しの一環として催さ
れる第九交響曲の合唱に参加出来るからです。私
は玉名の片田舎でほそぼそと合唱団活動を続けて
今年で31年、25回目の定演を11月6日に終えたば
かりです。第九とのかかわり合いは1959年ABC
交響楽団の演奏と合唱をしたのをはじめ、その後
数回うたい重ねてまいりました。その中でも鮮明
に浮んできますのは、それより数ヶ月前、一步さ
きがけて、我々合唱団独自の演奏会をもったこと
です。まだ今のように“第九、第九”、といってい
ない時に、委員長以下もえてかけ廻り団員を70名
名集めて、そして団員の一人が全曲移調し（1音
下げる）ピアノ伴奏でやった事です。必ずしも満
足できる演奏ではなかったかも知れませんが、手
作りでやったことに興奮し充足したものです。も
う私も58歳になり、第九をうたうのも最後かもし
れないなあと感激も一入で、改めてベートーヴェ
ンについて関心をかきたてられ図書館から彼の伝
記を三冊借りて来ました。そしてそれから私の興
奮がつづいているのです。周知のことですが彼は
1770年、今から120年前に生れ1826年、56歳で歿
しています。幼少の頃は貧しく、長じては宿痾に
悩まされながら最後まで天才的な湧き出る音楽の

世界にあり、多くの作品を残しています。第九は
若い頃から憧憬し、心の中に暖めていたシラーの
詩「歓喜に寄す」をとり入れたことです。『彼の生涯
に似た苦悩、模索は前奏において、レシタティー
フの出現を抑える様にして浮んでくる第一楽章、
第二楽章、第三楽章の主題の回想とそれらを否定
するように決然として出てくるレシタティーフ部分
との争いが繰り返される曲の構造にもそのまま反
映している。実に終楽章の初めての劇的な構成
は彼の模索そのもの、彼の悩みの心理そのものを
如実に表している。そして彼はついに歓喜に達し
た』と長谷川千秋氏（岩波新書）は述べています。
この年になってベートーヴェンが少し理解出来た
なあとこの思いは鳥詩がましい事でしょうか。又
彼は「音楽は男性の精神に炎を燃やさなければなら
ない」といっています。

紙面も残り少なくなり、とりとめのない駄文と
なりましたが、最後に彼の手紙の一節――
「行無き日はなし、私はなほ2、3の大作をこの
世に残し、それがすんだら年取った子供になり、
どこかで善良な人々に取り巻かれて地上の命を終
えたいとねがっている」（岩波新書）という言葉
は今、私の心を圧しています。

県立劇場での28日の公演には山田先生の指揮の
下で思いきり第九をうたい、終わったら彼の最後の
曲、作品135番へ長調四重奏曲を静かに聴きたい
と思っています。

「県民第九の会」実行委員会

| | | | |
|-------|-------|------|--------|
| 実行委員長 | 有馬 俊一 | 実行委員 | 藤枝 昭俊 |
| 実行委員 | 大島 俊治 | // | 三浦 洋一 |
| // | 沖津 正巳 | // | 本山 洋 |
| // | 蔵岡 隆 | // | 森 真一 |
| // | 下田 幸城 | // | 森 義臣 |
| // | 黒葛原 潔 | // | 山崎 崇伸 |
| // | 林原 隆治 | | (50音順) |

県民第九の会合唱団

〈ソプラノ〉

秋吉美保 浅野恵子 荒木美雪 安東道子 伊藤道子 稲岡福子 岩井麻記子 岩永一恵 岩永ひろみ 上村玲子 馬出裕子 浦田典子 緒方智子 小山富美子 大塚充江子 岡村桂子 岡村雪枝 萩尚子 川元由美子 工藤たみ子 草尾延子 草刈久美子 古閑聡子 古賀久代 後藤真理 小屋敷ひとみ 国米由希子 佐々裕里子 佐々木恵 佐藤恭子 斉藤恵美子 坂田智津子

桜井登美子 鮫島隆子 志岐由理子 清水令子 城久美子 篠原周子 下田富美恵 杉井隆子 田尻尚子 田中京子 高倉典江 滝瀬のり子 竹原富子 竹本栄子 土田真由美 堤名緒子 鶴本礼子 寺師敦子 富田浩子 中川敬子 中島智寿子 中島美枝子 中村和子 西田桂惟子 西田和子 橋本淳子 花田三也子 馬場圭子 早崎由美 林原サチ子 原賀さとみ

東 敦子

姫野絹子 平川美保 平野淑子 福岡圭子 福岡裕子 福田史子 福田睦子 藤本浩子 藤山真由美 藤山葉子 古田紀子 前田弥生 松田麻子 松田綾子 松浪裕子 松本知子 丸田裕子 丸田敏恵 水田久美子 南久美子 宮本恵子 村田信子 矢坂多佳子 矢次真季子 山本佳代子 山本倫子 山本幸子 吉松良志子 吉本洋子 渡辺和子

◎藤山緑

〈アルト〉

相川久仁子 相澤利江子 秋岡智子 浅見和子 有江朋子 伊佐真理子 石原恵子 磯崎ユウ子 市野亨子 岩下祥子 岩本昌子 上田秀子 牛草恵子 内尾仁子 内尾仁美子 江崎紀子 小野敬子 小山子 大島智子 大塚幸子 大平由布子 興津晓子 興津礼子 加藤裕子 可児為楚子 樺島治美 梶山美佐子 金井由美子 鎌田文代子 川畑貴子 木村典子 吉良主

北 嶋 比呂美

草刈登喜代 蔵田絹子 黒崎豊子 桑原典子 木葉祐貴子 坂梨順子 坂本幸栄子 坂本裕子 桜井むつ子 志柿昌子 志水チヨ子 重元麻里子 嶋田京子 白石陽子 杉本弘子 園田美智子 田中芳乃 田原忍子 田村紀子 田村直子 田高尾百合子 高竹下松子 竹田綾子 只隈恵美子 立石かをる 鶴田佐知子 徳永玲子 徳丸克子 豊田和代子 中岡順成子

◎田高尾

中 路 美 保

中村公美子 中村末子 中山節子 中山洋子 那須真奈美 西久美子 西村信子 野口寛子 野瀬京子 萩尾朱美子 濱崎道子 林由美子 速水立子 原口貴美子 平井裕子 平野みどり 平山由美子 広瀬祐子 廣野理恵子 橋本盛子 福山蘭子 藤本実恵子 堀内京子 堀尾美香子 堀田香代子 本多智子 前田直美子 町原麻理子 松野満世子 中山典子

三 浦 圭 子

三輪育子 南浩子 養田浩子 村上純子 本岩明子 八木ふさ子 安田昭子 矢住ハツノ 山口和子 山代圭子 吉武尚子 吉田伸子 米原工ミ子 渡辺明美

〈テノール〉

青木泰雅子 赤塚恒幸子 出水洋一子 板倉幸之輔子 井上正義隆子 内田隆徳子 梅林和雄子 大野昭雄子 沖田毅子 萩野勝広子 柏野守男子 北原宏子

小 泉 暁 裕

古賀賢二子 斉藤如由子 坂本憲照子 猿渡浩和子 杉本智典子 田中浩成子 千葉昌秋子 津田弘之夫子 土肥隆喜子 久野泰和子 福野靖之徳子 真藤和正義子 三根誠一子 水本誠俊子 免出雅臣子 森保一路子 山田泰輔子 吉原道彦子 米原敏郎子 渡辺不已夫子

〈バス〉

井上宏史子 伊藤博長子 石川良一子 石原敬典子 石村幸二子

岩 見 諭

上村誉治子 内田幸四郎子 衛藤純一子 小山健一郎子 扇基弘子 太田勉子 岡本秀一郎子 岡本貞三子 甲斐喜三男子 笠田英祐子 笠間政人子 鎌田嗣三子 神田一伸子 清原直行子 草刈秀克子 蔵岡隆一子 後藤俊治子 小南裕浩子 佐藤栄一子 坂口頼直子 清水真司子 嶋田博紀子 下川勉子 下川和久子 陳内邦昭子 末広克郎子 園田幸治子 蘭田保浩子

◎草刈秀克

インスペクター 藤 枝 昭 俊
◎印 パートリーダー

田 上 稔

高宮則生子 津江親博子 歳田和彦子 富田義晴子 中山工子 西岡令之盛子 西谷健二子 橋本新十郎子 東正生子 姫野隆一子 福山愛也子 藤本周一子 ベニグ・カスティヤ 本田正次朗子 本田正巳子 又野孝一子 松尾真淳子 松岡薫明子 三賀山丈士子 道上智浩子 村中孝和子 築瀬久和一子 山崎敏一子 渡辺重徳子 渡辺慎二子

熊本交響楽団

〈コンサート・マスター〉

山崎崇伸

〈1stバイオリン〉

山崎崇伸

広田元子

小山雅子

木村宣子

清永健介

桑原敦子

国米真基子

国米秀幸

長坂浩子

鈴木洋子

角田整保

東崎美貴子

鳥越昭

蓮田麗八郎

東真知子

広瀬大喜

山本登志子

山本繁市

吉永誠吾

永松孝

※山田和史

〈2ndバイオリン〉

鶴和美

大塚操

池辺敏一

荻原由美

上田忠幸

田上晴男

小出純子

西村典朗

野田和子

平井隆博

三輪直美

松崎浩二

宮本吉辰

本山洋

山本佳世子

松原美枝子

石垣祐子

野中紀代子

秋山敦子

岡純子

米京子

中野真由美

藤本佳澄

重石政和

〈ビオラ〉

牛島啓子

緒方肇

清元晃

国友由紀子

志垣裕子

高橋久美子

吉田美智子

森田茂武

草場立太郎

千々岩荘六

吉岡英子

工藤美保

国府慶作

※板頭剛

〈チェロ〉

長坂輝喜

岩永昭広

石垣博志

片山玲子

高浜秀光

長尾和治

井石哲也

山中朗史

三浦純子

水原真純

本山園子

古泉優子

矢野道彦

福永憲包

※荻原幸文

〈コントラバス〉

古泉俊彦

国米稔

正田吉男

後藤誠司

坂田拓司

平川和秀

大島和男

尾崎恵

北浦皓二

〈フルート〉

木村邦子

渡辺勝利

緒方宏明

柴田芳枝

福永里絵

加藤真理子

木村正義

西村親志

〈オーボエ〉

片岡久哉

辰野裕昭

田尻和也

宮本千草

清川正子

〈クラリネット〉

黒木健次

高野栄次

原敏郎

原田晃一

溜瀧孝二

〈ファゴット〉

黒田孔太郎

高木群之

小田穂積

田畑博美

〈ホルン〉

黒島原 潔

田畑博行

吉村善孝

安松真司

山口亮二

林 滋之

多久恵理子

〈トランペット〉

豊田恭司

中野真一郎

堀江幸司

福本伸夫

〈トロンボーン〉

田北洋康

鍋島靖夫

早川真二

古沢浩幸

〈パーカッション〉

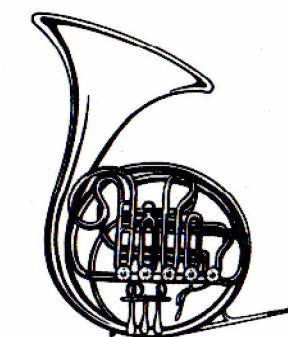
金坂義徳

大仁田弘喜

白尾友宏

増田政至

※ 豊橋交響楽団々員



この素晴らしいホールでの第九演奏会に向けて
団員一同張り切って練習を重ねてまいりました。
熊響としましては、この演奏会を第34回定期演
奏会に兼ねさせていただきます。
なお、この演奏会には姉妹オーケストラである

愛知県の豊橋交響楽団から恒例の派遣団員として
ヴァイオリンに山田和史、ヴィオラに板頭剛、チ
ェロに荻原幸文の3名が参加されています。

熊本交響楽団